特集

韓国の「反日」は永久に終わらない

ベトナム人虐殺を封印する韓国人の病理

日本の戦争責任を追及しながら、ベトナム戦争における自国軍の「住民虐殺」については隠しつづけようとするのが韓国である。

野田正彰（のだまさあき）
精神科医、ノンフィクション作家

1944年高知県生まれ。北海道大学医学部卒。長浜赤十字病院精神科部長、関西学院大学教授などを歴任。著作に大宅賞受賞の『コンピュータ新人類の研究』、『犯罪と精神医療』、『うつに非ず』など。

隠されてきた虐殺

ベトナムに侵攻した韓国軍によるベトナム住民虐殺が、韓国でにわかに知られるようになったのは1999年5月から一、二年のことである。アメリカでベトナム戦争介入の泥沼のなかで告発された虐殺問題は、反共国家・韓国では完全に隠されてきた。三十数年をへて、97年、ベトナム国家大学ホーチミン市校へ留学した女性研究者、ク・スジョンが研究を始め、韓国の市民団体ナワウリ（私と私たち）と共に検証を行った。

99年5月6日の週刊誌「ハンギョレ21」の記事はこう書いている。

「66年1月23日から2月26日までの約一カ月間、猛虎隊3個小隊、2個保安大隊、3個民間自衛隊によりビンディンソンを中心とする四地域（ベトナム中部海岸部の稲作農村地域）だけで、約1200人の住民が殺された。韓国軍による虐殺を類型化してみると、

〈住民（ほとんど女性と子ども、老人）を一カ所に集め、あるいはいくつかのグループにまとめ、機関銃を乱射して抹殺する。／住民を一戸に追い詰めて銃を乱射した後、家に放火し、生存者を含めて燃す。／子どもの頭を割ったり、首を切り、四肢を切断して、火へ放り込む。／女性を強姦した後に殺害。妊婦の腹を胎児が破れ出るまで軍靴で踏み潰す。／住民を村の穴蔵に追い詰め、毒ガスで殺す。〉

まるで第二次大戦期、日本軍による中国やフィリピンでの虐殺事件についての告発文を読んでいるかのようだ。しかも、さらに組織的に残虐に行われたことをうかがわせる。

クーデターによって権力を奪い、第5代大統領（63年10月～）になった朴正熙（パクチョンヒ）は、政権を安定させアメリカからの対韓軍事援助を増強させるために、ベトナ

ム派兵を行った。1965年10月、第一次ベトナム派兵以降、74年まで、猛虎部隊、白馬部隊、青龍部隊を中心に常時4万人、のべ40万人の兵士をベトナム中部へ送り続けた。虎、しかも猛虎。馬、しかも白馬。龍、しかも青龍、軍隊はあいかわらずトーテミズムに生きている。この様な韓国軍による残虐行為は「TIME」誌などアメリカ発の報道でもれ伝わるところであったが、韓国内で言及することは許されていなかった。

「ハンギョレ21」のキャンペーンへの反撃はすさまじかった。退役軍人は横のつながりを強化し、ついに2000年6月27日、「大韓民国枯葉剤後遺症戦友会」の約2400人がソウル市麻浦にあるハンギョレ新聞社を襲い、坂の上から投石してガラスを割り、コンピュータを壊し、編集局長を脅迫し社員十数人を傷つけた。社屋を半日占拠し、なかには飲酒、放火する者もいた。彼らは、国のために戦い、今なお枯葉剤の後遺症に苦しみ補償も受けていない戦友を冒瀆した、と激怒したのだった。これほどの暴挙を起しながら、逮捕者は5人でしかなかった。なお軍部とつながりの強い「朝鮮日報」、「東亜日報」はハンギョレ新聞社のキャンペーンを追うことはなかった。朝鮮日報と連繋する毎日新聞、東亜日報と連繋する朝日新聞なども、この問題をほとんど報道しなかった。

退役兵の面接をしにソウルへ

この新聞社襲撃事件の後、紆余曲折があった後、ようやく討論会がもたれることになった。「軍事評論家協会（朝鮮日報や東亜日報の論説委員が少くない、「戦友新聞」を出している）とベトナム戦争真実委員会（ハンギョレ21の報道に啓発されて集った市民団体）、共同討論会――韓国軍のベトナム参戦に再び光をあてる」が2000年12月15日、ソウルの中心街、明洞（ミョンドン）の全国銀行連合会大会議室で開かれた。

私は半年ほど前から、ハンギョレ新聞社より退役海兵隊員の面接分析に来てほしいと依頼されていた。韓国の精神科医で、この問題を扱える人は見つからない。戦争の精神病理学的研究を続けてきた私に、ベトナムで虐殺に関与したと名乗りでた元軍人3人を面接してほしいとのことだった。私は共同討論会に出席した後、3人の面接をする予定でソウルへ行った。

当日の正午、明洞の聖堂の前、銀行会館のホールに入っていくと、驚いた。800人ほどが入れる大ホール、すでに八割は迷彩戦闘服を着用した在郷軍人や海兵隊の退役者に埋めつくされていた。「非暴力的討論会」と銘打っていたが、迷彩服の男たちは真実委員会側のシンポジスト（大学教授）に詰めより、「お前ら、ベトコンと同じ共産主義者だ。戦場で会えば殺す」と脅していた。

なぜここまで激昂するのか。司会を無視して会場階から延々と喋り続ける蔡命新（チェミョンシン）・元ベトナム派遣軍司令官の主張はこうである。

「民間人を守ろうとした軍隊は、歴史上我々だけだ。我々はベトナム人のためによいことをした。田植えもした。家も建て、子どものためにパーティを開いた。六人のベトコンを処刑したとされる小隊

長を死刑にせよ、という意見が出るほど、良心的な軍隊であった。毛沢東思想、農民のものに手を出してはいけないという思想を実践していたのは、我々である。

米軍からの手当の月80ドルも使わないで、すべて郷里へ送金していた。ベトナム戦争で韓国人は外へ出て、初めて自信をもった。国のために戦って、枯葉剤による後遺症に苦しむ三万人以上の退役者がいる。私は孫の世代に、『良民を殺した』と疑われるのは耐えられない。極限状態で起った稀な事件を、ベトナム派遣軍全体のことにするな。我々の名誉は政府、国防省が守るべきである。新聞、雑誌に二度と〈韓国兵のベトナム人虐殺〉といった記事を載せるな。（家族とあわせると）500万人になる我々は、絶対に許さない」と凄んでいた。

壇上のシンポジスト（国防大学院長、元師団長）は、「今、韓国の資本がベトナムに入って感謝されている。不幸な過去をとりあげるのは国益に反する。ベトナムから補償要求が出たら、どうするのか」という。

南北問題研究所の教授は、「ベトナム戦争は決して侵略戦争ではない。ベトナム戦争を批判するチョムスキー（言語学者）は共産主義者だ。韓国派遣兵をアメリカの傭兵とは何ごとか。国家が派遣したものを傭兵よばわりしてはならない。ベトナム参戦は、金日成の第二の侵略戦争を防ぐための愛国戦争だった。それを否定するのは反韓的発言だ」と叫ぶ。ウォーという声と拍手がなり止まない。「ベトコンの処刑を証言した将校は精神病でないか。討論会で証言させるべきだ」という脅迫も飛び交う（この元大佐は、私が後日面接した三人の内の一人。勿論、立派な人であった）。

ベトナムでの虐殺を暴露された元軍人、韓国人の反論――反論というより、怒りの感情といった方がよい――をまとめると、7点に整理できる。

①ベトナム派兵は、韓国が経済成長するための貴重な資本となった。生命を代償に働いたのである。②またベトナムの共産軍と戦うことで、北朝鮮の侵入を防いだ大義の戦争である。③韓国軍は良心的軍隊であり、農民虐殺を行っていない。共産主義者、毛沢東の主張まで引用して、否認している。④殺害したのは全て共産軍兵士（ベトコン、ベトミン）であり、敵を殺害してどこが悪い。たとえ農民が殺害される事件があったとしても、極めて稀な事件であり、極限状況の偶発事件は止むを得ない。⑤不幸な過去を今さら問題にし、ベトナムから補償要求が出ると困る。国益に反す。⑥日本の植民地支配、従軍慰安婦問題について批判しているのに、韓国も同じだったと見なされるのは耐えがたい。⑦さらに、こんなことを調べたり、言ったりする者は、反韓的であり（日本風では非国民）、共産主義者であり、あるいは気狂いだ。

自国の誇り（愛国心、聖化）から、事件の前もっての否認、そして事実を調べようとする者を抹殺しようとする攻撃性、この三つの間を揺れ動いている。

ハミで起ったこと

実際はどうだったのか。

私が面接した三人の退役兵の一人、

鄭陳秀（チョンジンス）さんは、66年7月、初めて参加した作戦から村民の虐殺を行ったという。

「テントを偽装する木の枝葉を採ろうとして狙撃され、三人が負傷した。先任兵は怒り、集落に残っていた二十数人の女、子ども、老人を処置すると言った。爆撃跡の15メートルほどの凹地へ追い込み、言われるままに手榴弾を投げ、さらに射殺した。土埃がおさまると、泣き声が聞こえた。少女がわめいていた。顔が合った。銃で撃った。何も感じなかった」

「村に入ったとき、逃げる者は射殺する。残った村人は部隊の様子を知っているので、そのまま放免できない。結局は殺してしまう。いつか死ぬと思っていたので、殺すことをなんとも思わなかった」

「どんなに酷いことをしていたか。中隊の先頭が撃たれると、士気が落ちる。そんな時はなんとしてもベトコンを見つけて殺した。そして銃を連射して首を切断し、無線用バッテリーを包んであったビニール袋などに入れ、新兵のザックにつるして行進した。昨日のことのようだ」

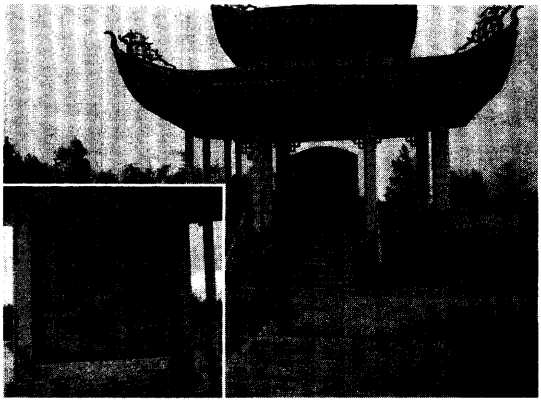
やがて敗戦、ベトナム戦争は終り、三十数年がたった。韓国の企業がベトナムに進出するようになり、ベトナム観光に行く若い韓国人も多くなった。彼らは韓国兵が何をしたのか、どこに拠点を置いていたのか、どんな作戦をしていたのか、知らない。だが多くの観光客が訪ねる古都ホイアン近郊から南の海岸部農村には、点々と虐殺の村が続く。

クアンナム省ハミもそのひとつ。港町ホイアンのすぐ北東に位置する。68年2月24日早朝、韓国軍の青龍部隊（海兵第2旅団）の兵士が村人を狩りたて、手榴弾とM79銃を連射して村人135人（女性98人、10歳以下の子ども57人、60歳以上の者14人。生後すぐの赤ちゃんもいた）を殺した。西ハミは韓国軍が居住を認めた集落であり、虐殺の数日前より韓国軍は村人を集めてパンを配ったりしていた。そのため、その朝もパンをもらえると思って一カ所に集ったのだった。韓国軍は虐殺の後、戦車で村民の遺体を轢きつぶしていった。付近の村民は「二度殺された」と言っている。

1999年9月、何を思ってか、元青龍部隊の男たちがハミ村を訪ねてきた。各地の虐殺された村、消えた村には「憎悪碑」、ドイモイ政策後は「追悼碑」が建てられてきた。だが資金がなく建てられない村も多い。ハミもそのひとつであった。韓国退役兵たちは追悼碑を建てる資金2万5000ドルの寄付を申し出た。こうしてハミ村の属するディエンズオン社（「社」は行政組織の単位）が土地を、村人が建設労働を提供し、2000年11月に完成した。

大きな大理石板の碑の表には、殺された人びとの名前、裏側には事件の経過を書いた詩が彫られていた。しかし私が現地を2011年8月に訪ねたとき、裏面の詩はなかった。大きな蓮の花が四つ咲く石板になっていた。

「青龍部隊の兵士が135人を殺した。ここは血に染まり、砂と骨とが入り交じり、家は焼かれ、火に焼かれた死体がからみあい、焼けた死体をアリがかじり、血のにおいが満ち満ちていた。爆風が吹き抜けると、さらに悲酸だった。破壊された家では年老いた母や父が呻きながら



ハミ村の追悼碑。中央の大理石板の表には、殺された人びとの名前がある。裏の詩は、蓮の花の絵で覆われた（左下）。

死に、子どもたちは恐怖におびえた。逃げた人は銃撃されて死に、子どもは死んだ母親のもとに這って行きお乳を吸った。もっとひどいのは、戦車で遺体を踏み潰したことだ。（中略）過去の戦場はすでに苦痛が和らぎ、韓国人がここを再訪し、恨めしい過去を認め、謝罪した。そして赦しのうえに、この石碑を建てたのである」

こう書かれていた碑に気付いた韓国元軍人たちは、韓国政府を通して修正削除を要求した。

この間の事情について、最近出版された伊藤正子さんの『戦争記憶の政治学』（平凡社）が詳しく書いている。それによると、「碑文の内容まで干渉することは受け入れられない。これは我々の歴史で過去であり真実だ」と拒絶する村民に、ハノイの韓国大使館が関わって執拗に圧力をかけている。村が言うことをきかないため、ベトナム政府を通して、省、県の説得に当らせ、さらに地元の幹部を韓国に招待して懐柔した。長期の抵抗の末、村人は「歴史を歪曲して記録するより、記録しない方がよい」として全文削除を決めた。村人は考え抜き、裏の碑文に蓮の絵の石板を重ねてフタをしてしまったのだった。「これこそ歴史にフタをすることだ」と村人は言っている。私が訪ねたとき、村人の抵抗と矜持の証としての蓮の絵の石碑を見たのであった。

韓国軍に残る旧日本軍の伝統

韓国軍は旧日本軍の伝統をよく残していると、韓国軍人自身がいう。旧日本軍は敗戦で解体され、自衛隊は一応新しい武力組織ということになっている。それとても、旧日本軍人が再就職して創ったのであり、少からぬ残滓を受け継いでいるであろう。他方、韓国軍は旧日本軍がそのまま継承され、朝鮮戦争を戦った勝利の軍隊として国家権力の中枢にあり続けた。例えば今日の韓国の基盤を創ったとされる朴正熙（1961年5月の軍事クーデターから79年10月に部下に射殺されるまで、独裁体制のトップにあった）は、1942年満州国軍軍官学校から日本の陸軍士官学校に学び、関東軍に配属されている。

彼らが創った韓国国防軍の文化は、戦前の日本陸軍内務班の日常とよく似ているといわれてきた。私が面接した元海兵隊員は、

「訓練と罰が区別されておらず、上官による暴力が横行。そのため耐えきれず自殺する新兵や、棍棒で殴られて死ぬ者も少くない。だが上官の責任は問われない。小さい毛布の上に40人が重なって乗る

ように命じ、『はみ出ている』といって教官が棍棒で殴る。飯を25秒で食べなければならない。一人でも遅れる者が出ると、班全員が石だらけの道を500メートル、腕を後に組み蛇のように這って進まされた。小石の上に、点々と血がついていた。冬、パンツ一枚になって消防ホースの水で打たれた。『動作がのろい』といっては、理由なく殴られる。上官は歯ぎしりしながら、悪相で喋る。掛け声は『悪、悪、悪』だ」

と語った。

こんな訓練をへて、軍人の心情を植えつけられる。ところが、日本軍時代を知る元幹部軍人の心情には複雑なものがある。1980年初め、朴正熙が殺され厳戒令下にあったソウルで私を世話してくれた元軍人は、私が土産にもっていった小さな短冊にきざんだ塩昆布を喜んでくれた。「毎日ひとつ、食べるのが楽しみです」といっていた。塩昆布は韓国にないわけではない。だが日本から持っていった短冊の塩昆布は、彼にとって少年期のなつかしい味だった。それは他人にもらしてはならない、心情の味覚だった。

日本、韓国、アメリカ、できれば中国の軍隊の（初年兵訓練を含む）文化の比較研究は、紛争と戦争犯罪を予防するためにも重要だが、そんな研究は許されていない。

また、報道をみている限り北朝鮮は旧大日本帝国によく似ている。天皇制軍国主義国家がそのまま石化して生き残っているかのようだ。

朝鮮民主主義人民共和国の建国の神話は、白頭山（中朝国境にある火山。中国側にあり、長白山という）に将軍様（金正日）がお生れになったとき、山の上に将軍星が輝いた。それと同時に、富士山の上の空は暗黒になった、というものであるという。

金日成は1941年ごろハバロフスク郊外に亡命しており、息子の金正日はそこで生れている。虚偽の誕生物語に加えて、富士山の暗黒が対比されるのがおもしろい。これほどまでにコンプレックスに衝き動かされている。挙げれば限がないが、例えば北朝鮮のテレビ放送で、腹に力を入れておごそかで滑稽な声をふりしぼるおばさんアナウンサーの語りの、なんと大詔奉戴日（大政翼賛会）の放送に似ていることか。

＊

韓国を嫌悪し競い合っているとき、その言説は自らの文化を投影し、相手のなかに自分を見ているのである。だがその心理装置は抑圧されており、気付くことは難しい。年代を遡れば、近代のはじまり、福沢諭吉の「脱亜論」、「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」（ともに1885年、「時事新報」）にしても、遅れた日本社会への嫌悪を朝鮮に置き替えて、西洋化できない朝鮮社会を否定していただけである。中国文明のもとに国を造り、欧米の政治、経済、武力のもとに生きてきた極東の国々は、その心理メカニズムにおいて似ており、その嫌悪のあり方においても似ている。他国の姿に自分たちの姿を見つめ、苦痛であっても事実を伝え合うことによって、自己理解を深めていくしかないのではないか。

45